



No.302  
2014年9月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所  
発行者 大町 慶華  
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
☎(0577)32-0776  
\*毎月20日発行 50,000部  
三市一郡無料配布  
印刷 山都印刷株式会社

# 念じられ 照らされて

## ここに「南無阿弥陀仏」があった

海 法 龍



〔略歴〕  
一九五七(昭和三十二)年、  
熊本県生まれ。東京教区長願  
寺住職。真宗大谷派首都圏教  
化推進本部員。『サンガ』編集  
委員。

明け方の四時ごろ枕元の携帯電話が鳴った。兄嫁である姉さんからだ。一瞬たじろいだ。僕は覚悟を決めて電話を取った。「息が荒くなってきたの。最後に、最後に」、姉さんがそう言う。と、酸素の呼吸器の音と一緒に、兄の荒い息づかいが聞こえてきた。

前日の夜遅く、危篤の知らせがあった。故郷に帰るには、すでに交通手段は何もなかった。明日、早朝の飛行機に乗って、兄の「その時」に間に合えばと思っていた。

「兄ちゃん、兄ちゃん、ナンマンダブツだ、ナンマンダブツだ、兄ちゃん。ナンマンダブツだ」。荒い息づかいだけが聞こえてきた。喋れる状況では

ないことが、すぐ察知できた。何か言わなきゃと思ったけど、僕にはそれしか言葉にできなかった。兄は「南無阿弥陀仏」に生きた。亡くなった僕たちの父も「南無阿弥陀仏」に生きた人だった。僕も、そういう縁をいただいて、はからずしも念仏の縁の中にある。若いころ自分を持って余し苦しんでいたころ、兄は「苦しんでも良いんだ。必ず教えは聞こえてくる」と、いつもの物静かな口調で話してくれた。兄と僕は八つ違い。父は仕事の関係で留守がちだったから、兄は僕にとってもう一人の父だった。

その兄を喪った。電話を切って二時間もしないうちに、亡くなった知ら

生があった。僕はこの「64」に、兄の生きてきた人生の重みを感じていた。いや、どんな人も、肌の色が白くても黒くても黄色くても、幾つで亡くなるうとも、一人ひとりには誰にも代わることのない唯一無二の、存在の重さがあるのだ。死はその重さを象徴していた。

兄の病気の再発が告げられた時、兄の息子の連れ合いに、初めての、新しい命が宿っていることがわかった。兄はとても喜んでいて。二ヶ月後の自分の死、なんて想像もしていなかった。生まれ替わってくる子に会えることを、ただ待ち望んでいた。しかし、抗がん剤で傷んでしまった身体は回復することなく、坂道を転げるように衰弱していった。そして兄の死から七ヶ月後に、一人の女の子が産声をあげた。

お釈迦様の誕生の物語に「天上天下唯我独尊」がある。いつでもどこでも誰でも唯一無比の存在の尊さを教えている。つまり、オギャーと産まれた命は、どんな命も同じ命を生きている平等な存在なのだ。生まれは尊さを象徴していた。私たちは生死する存在だ。生まれは「尊」で死は「重」ならば、人間存在は尊重さるべき深さを

もった存在なのだ。ここに私たちの本来性があるのだらう。どんな人も尊重されなければ、家から社会からも居場所がなくなっていく。生きる場を奪われることは、命を奪われるに等しい。実際、私たちはその本来性の中にありながら、そのことに気づかずに、自分の気持ちに合うものは尊重し、合わないものは尊重しないで、卑しめ軽く扱ってしまう姿で生きている現実がある。

ここに「南無阿弥陀仏」があった。先祖先輩たちが、兄たちが出遇った世界が、生と死に出会って「南無阿弥陀

仏」の精神が立ち上がった。阿弥陀は無量寿。「帰命無量寿如来」。いつでもどこでも誰でも無量なる、はかりしれない一人ひとりの寿(いのち)。どんな人も尊重さるべき存在。その本来性を失って彷徨する僕たちに、本来性へ帰れと呼びかけ、本来性を失っていることを気づかせようと、はたらきかけているのだ。

兄が死んで、もうすぐ一年が経つ。変わらない日常の中にいる。しかし、何かが違う世界が、「南無阿弥陀仏」が、僕自身の思いを超えた僕自身の奥底から、僕自身に現前している。

秋の彼岸会。永代経法要  
亡き方を縁として仏法に出遇う大切な仏事です。ぜひお参りください。  
9月20日(土)〜26日(金)  
午後一時から勤行・法話  
20日(土) 岩佐 幾代氏(浄永寺坊守)  
21日(日) 大町 慶華 (別院輪番)  
22日(月) 小原 正憲氏(専念寺住職)  
23日(火) 竹田 雅文氏(東等寺住職)  
24日(水) 四衢 亮氏(不遠寺住職)  
25日(木) 三本 昌之氏(蓮徳寺住職)  
26日(金) 三島 多間氏(真蓮寺住職)  
お彼岸バザー開催!!  
期間中、御坊さま名物のおはぎ(高山・広島豪  
雨災害義援)や松のしおり等の販売を行います。  
お参りの際にはぜひお立ち寄りください。

### 飛驒の真宗

## 蓮如岩 下呂市馬瀬中切

昔々、越前(福井県)から飛驒の地へ布教に来て、檜谷(清見町)を経て馬瀬の黒石で滞在されたお坊さんがありました。その話を聞きつけた大勢の人々が村の内外からお坊さんのもとへ集まって、説法に耳を傾けていました。日々は過ぎ、そのお坊さんが旅立つ日がやってきました。人々は別れを惜しみ、美濃(郡上市明宝)へと続く峠のてっぺんまでお坊さんを見送りしました。その戻り道、峠の中ほどまで下りたとき、林の間を縫うように流れてくる、お経を読む不思議な声が聞こえてきました。一体誰の声だろうと人々は探しました。やがて、身を休ませている人の影が見えてきました。しかし近寄ってみると、それは岩肌にくっきりと映っているお坊さんの姿の影でした。「この間、ここで休憩しとったあの坊さまに違えねえ。」人々は早速お堂を建

ててそのお坊さんの影が写った岩を安置しました。まもなくして、村にこんな話が伝わってきました。「この間、この村に来とったあの坊さま、本願寺の蓮如さまやったそうじゃ」

村の人々は感嘆し、深く敬意、親しんできたその岩を「蓮如岩」と呼び、現在まで守り伝えていきます。現在のお堂は蓮如上人の五百回忌にあわせて、平成八(一九九六)年に再建されました。



蓮如岩を安置しているお堂



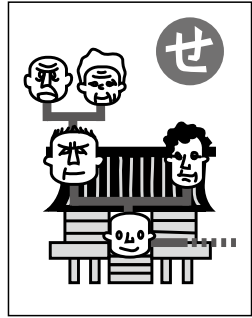
岩にうつった影

☎テレホン法話(0577)(34)2313 ☎9月21日〜30日:上清水信男氏「西蓮寺」 ☎10月1日〜10日:渡邊修氏「了因寺」 ☎10月11日〜20日:松本大輔主計「教務所」 宗教トラブル相談窓口(0577)13210763

家族で語ろう

女と男のナムアマミダブツ④

藤場 芳子



世襲制 寺は一体 誰のもの

初めての歌舞伎

この夏、生まれて初めて歌舞伎を観ました。日本の伝統芸能を鑑賞しようなどという高尚な志からではありません。東京で一人暮らしをして母の気分転換に、どこか涼しい所に出かけようと思案した結果の歌舞伎だったのです。

初心者にはイヤホンガイドが便利だと聞いたので、説明を聞きながら舞台を観ました。懐妊している大名の正妻を毒殺しようとする愛妾。その愛妾と手を組んでお家乗っ取りを企てる家老。愛欲と権勢欲が交錯する舞台でした。女形の役者さんの「女性らしい」仕草に注目したり、大名が美しい小姓を愛するという設定にドキドキしたり、ジェンダーの視点からも、実に楽しい時間でした。

正直に言うと、私は歌舞伎にあまり良い印象を持っていませんでした。梨園と呼ばれる、どこか特別な社会。しかもそこは男だけの世襲制です。しかし、考えてみれば、私が暮らす真宗大谷派(東本願寺)でも、多くのお寺が世襲制によって受け継がれてきたのでした。

寺を継ぐということ

寺の長男である夫から「女性はお寺を継げないんだ」と聞いたのは、今から三十年以上前のことでした。仏教を学び始めた頃だったので、とてもビックリしました。

阿弥陀様の前ではすべての人が平等であり、それを気づかせてくれるのがお念仏のはたらきだと思っていたので、性差によって排除されるなんて考えてもみなかったのです。長女、次女を出産した私にとって、女子が寺に生きるとはどういうことなのかずっと課題になってきました。

その後、女性に対する差別発言をきっかけに、この問題がわかに議論されるようになりまし「男子がいけない場合」という条件付きで女性が住職に就任できるようにになったのが一九九一年。性別や生まれた順番も問われなくなったのが一九九六年のことです。ではそれで一件落着かというところではないから、今回の句「世襲制 寺は一体 誰のもの」が作られたのだと思います。この句の中

で私が一番心に響くのは「誰のもの」という言葉です。お寺は念仏の道場として開かれてはいるはずなのに、それとは反対に閉じられているのではないか、私たちが本当に継ぐべきものは何なのか、わかたつもりで日々を過ごしてはいませんかという厳しい問いかけがあるからです。

獅子身中の虫

制度が変わってもそう簡単に私たちの意識は変わってくれません。世襲制そのものより、それを生み出す固定化された古い意識が問題なのだと思えます。娘に彼氏ができたとき聞いた時、「養子に来てくれるかしら」とすぐに思ってしまった私がいます。親鸞聖人はお手紙の中で、仏法を破る人は外にいるのではなく、仏法者として自負する人の中にいるのだ、としてそれを「獅子身中の虫」とたとえておられます。自分の中の虫をよくよく見つめなければ、いつの間にか

食い破られてしまいます。歌舞伎では芸が引き継がれます。仏法は何を引き継ぐのでしょうか。私たちの身近なところでも同じような意識が問われることはありませんか。本質が見失われるということはないでしょうか。

次回の「家族で語ろう」はお休みします。酒井義一さんの「私を照らすひかりの言葉⑤」は第304号(11月20日発行)に掲載となります。

子ども作品展 作品募集

10月25日(土)から11月8日(土)まで、高山別院本堂にて「子ども作品展」を開催します。ご応募ください。締切 10月10日(金)必着

書道の部

小学二年以下 「はす」 小学二年 「ともしび」 小学三年 「寺のにわ」 小学四年 「信ずる心」 小学五年 「念仏の道」 小学六年 「如来大悲」 中学生 「御坊報恩講」

絵画の部

小学生 楷書・半紙 中学生 楷書または行書 半切1/4紙

坊文化講座 (第3回)

日時 10月3日(金) 午後1時30分から 講題 「嘉念坊上人 ゆかりの莊川桜」 会場 別院庫裡ホール 講師 渡邊 登氏 (莊川観光協会 会長) 会費 600円



おきなま 別院の報恩講で何を問われる

問 帰敬式とは「おかみそり」ともいい、仏(お釈迦さま)、法(南無阿弥陀仏の教え)、僧(法を聞く人の集まり)の三宝を、人生において尊いものとしていただき、みずからもその集まりの一人として生活することを誓う儀式です。

私たちは現代社会において、苦悩し、迷い、さまざまな課題をかかえながら生きています。帰敬式は、そんな私たちが、物質的価値にとらわれ、本当に大切なものが見えなくなっているか、依りどころにすべきものがあるかをあらためて問い直す、人生の再出発の儀式とも言えます。

帰敬式では、髪をおろす(剃る)ことをかたどった剃刀の儀と、釈迦牟尼仏の「釈(女性性は「釈尼」)の字が冠せられた法名の授与が行われます。剃刀の儀は虚飾の生活を離れて、真実の人生を求めるという意味があり、また、法名の「釈」はお釈迦さまの弟子となつた、仏弟子としての名告りという意味を持ちます。

では、仏弟子となつて真実の人生を求める生活とはどういうことでしょうか。まずは仏弟子の名告りである法名の意味をたずねてみましょう。そして、家のお内仏に向き合う時間を持ち、積極的に法座・報恩講にお参りするなど、お寺に身を運びましょう。私たちに先立って、苦悩の人生に宝を見出された親鸞聖人の歩みに聞きながら、同じ仏弟子となつて、真宗門徒となつて、自分自身のあり方を見つめ、たずねていく生活をはじめてみましょう。

高山別院報恩講 帰敬式受式者募集

日時 11月3日(月) 午前9時から 会場 高山別院本堂 申込 10月17日(金)までに、お手次ぎのお寺へお礼金(13,000円)を添えてお申し込みください。

10月壇案内

詳細は会所のご寺院にお尋ねください。 【9月】 23日(火)圓徳寺[漆垣内町] 霊雲寺[神田町] 25日(木)浄念寺[莊川町] 26日(金)本教寺[西町] 27日(土)随縁寺[上切町] 28日(日)西念寺[国府町] 【10月】 5日(日)寶圓寺[漆垣内町] 15日(水)圓龍寺[大門町] 18日(土)還來寺[丹生川町]

沖繩の響

非戦平和の願い 映像と音楽による沖繩の響きから、非戦平和のメッセージを心に刻みましょう! 内容 沖繩戦記録フィルム 『軍隊がいた島』上映 沖繩音楽のしらべ 大工哲弘氏 (沖繩県無形文化財(八重山古典民謡)保持者、『徹子の部屋』テレビ出演) 日時 10月31日(金) 午後7時から 会場 高山別院本堂 入場料 1,000円

定例法座・法話(午後1時から) ○9月27日(土)大町慶華輪番 ○9月28日(日)森三智丸氏「秋聲寺」 ○10月1日(水)畑亮氏「願徳寺」 ○10月11日(土)大町慶華輪番 ○10月13日(月)細川寛氏「浄慶寺」